

娘が「魂の不滅」について訊ねたとき

学習指導係長 赤塚 公生

よもやの「不登所」

5年前の春、私は4歳半になった娘を近所の保育所に入れた。いわゆる「2年保育」である。

娘は、快活で人見知りのしない性格に見えた。近所に同年輩の子どもがいないこともあり、仲間との遊びの経験は少なかったが、取り立てて心配する必要はないように思えた。

だから、一週間も経たないうちに「もう、絶対行かない」と言い出したときは、家族中がびっくりして考え込んでしまったのである。

実は、親が「人見知りしない性格」と思ったものは、そばに親がいて初めてそうになっていただけだったのだ。新しい環境に戸惑い、すぐめそめそするために、娘は「泣き虫」と叱責され、ますます自信を失って、一人涙をこぼしていた。

私は、保育参観に行き、担任の先生と話し合ったり、隣の席の子どもさんを自宅によんで遊んでもらったりして、事態を改善しようと努めた。

「お父さん、人間の魂は不灭なの？」

土曜日の夜、保育所まで迎えに行き、私は娘と市内の児童公園に出かけるようになった。明るい楽しい気分にして、元気を出させようと考えたからである。遊び疲れた帰りに、ハンバーグランチやアイスクリームを食べるこの小ピクニックは、娘にとっても楽しいひとときであったようだ。

ある時、帰りの車の中で、娘は、満足し甘えたような口調で、突然私に訊ねた。

「ねえおとうさん、ニンゲンのタマシイって、ほんとうにフメツなの？」

私は、5歳にもならない娘が人間の「魂の不滅」について考えていることに少し驚き、次に父親としては、古代ギリシャ以来の哲学的疑問が幼児の心にも宿ることに、少なからぬ満足感を覚えた。

「なかなか難しい問題だな。確かに、死んでしまえば、実際はもう話もできないし会えなくなる。しかし、魂が存在し続けるかどうかは……」

それからしばらくして、苦しい時期は終わりをつけた。娘は、次第に環境に適応し、友達にも恵まれて、程々に快活な小学3年生に成長した。

ある日、娘を乗せて車を走らせていた私は、ふと「魂の不滅」の話をしたことを思い出し、どうしてそんなことを考えたのか娘に訊ねた。

「だって！……あのころわたし、わたしは本当に死にたかったんだもの！」

私は、思わず絶句した。多分、私は顔がひきつり、ハンドルを持つ腕は強ばっていたことであろう。娘は、たとえ死んでも「セーラームーン」のように魂が不灭ならば、児童公園にも行けるし、ハンバーグランチもアイスクリームも食べられると考えていたのである。毎日泣きながら苦しんでいる娘が、アニメにヒントを得て、「魂の不滅」に託した気持ちが、私にはまるで分かっていなかった。

以来、私は「子どもの心の理解」と言おうとすると、微かなためらいを感じるのである。